睡眠時無呼吸症候群の呼吸機能検査

○横田　由美子,山中　雅美,今井　竜子,幸　道,増谷　喬之,岡本　康幸
(奈良県立医科大学附属病院　中央臨床検査部),福岡　篤彦,木村　弘
(奈良県立医科大学附属病院　呼吸器内科)

睡眠時無呼吸症候群(SAS)は、睡眠中に頻回の呼吸停止を来たし、低酸素血症から夜間の睡眠障害を起こす疾患である。よって日中の傾眠傾向や集中力の低下から患者さんの作業能率が低下し、居眠り運転による交通事故等が報告されていることから社会的に重要な疾患として近年注目を浴びている。また度々引き起こされる夜間の覚醒反応によって、交感神経過緊張をきたし心血管系に過度の負荷を強いる為に高血圧や虚血性心疾患の増悪因子としても注目されている。我々は今回、SASの診断治療の目的で入院された患者さんについて呼吸機能検査を行い、いくらかの知見を得たので報告する。

＜対象＞　平成14年4月から平成16年4月までの約2年間に当院でSASの診断治療の目的で入院された患者さん100名で、内訳は男性22歳～80歳（平均50.2歳）89名、女性55歳～84歳（平均65.3歳）11名である。

＜方法＞　呼吸機能検査はﾌﾀﾞｯｸ70（ﾌｸﾀﾞ電子社製）を用いた。身長・体重を測定し、体格指数（BMI）を肥満度の指標とした。終夜睡眠ﾎﾟﾘｸﾞﾗﾌ（PSG）の結果より、Apnea-hypopnea index（AHI）を重症度の指標とし、昼間の眠気はEpworth Sleepiness Scale（ESS）を用いた。

＜結果＞　BMI25以上を肥満とした時、男性89例中76例（85.4%）、女性11例中6例（54.5%）に肥満を認めた。またAHI30以上の重症者は男性で54例（60.7%）、女性で3例（27.3%）でありその内肥満は男性51例（94.4%）、女性で2例（66.7%）でありSASの重症者に肥満者が多い傾向があった。AHIと呼吸機能の各指標では%RV、%FRC、%TLCが有意な相関関係を認めた。ESSはAHIとの間に有意ではあるが弱い相関であった。

＜考察＞　1) SASの重症度を示すAHIと%RV、%FRC、%TLCは有意な相関を認め、SASの特徴である肥満の呼吸機能の特徴を反映している可能性がある。2) ESSとAHIとは弱い相関を認め、昼間の眠気はSASの重症度以外の要素が関与する可能性がある。3) 覚醒座位の検討では、SASの特徴を示すことは困難である。

連絡先　TEL　0744-22-3051（内線　4226）